目　次

序――17音（川柳）と31音（狂歌）――　5
俳諧の流れ　12
名句の周辺　23
蕉門と川柳の近似句　38
蕪村と川柳　55
句法　55
詠史　61
蕪村と川柳の近似句　66
一茶と川柳　74
句法　74

凡　例

一、本書は、俳諧と川柳狂句・川柳狂句の構造・川柳狂句と史伝のうちの一部である。

一、本書の引用は主として誹風柳多留全集、三省堂版によった。略記号とした（柳10）は、柳多留10篇をさす。その他の柳書よりの略記号は、次の通りである。略記号の下の数字は

会話句　76
擬態・擬音語と畳語　80
小動物・蝶　87
一茶と川柳の近似句　91
自然の景趣　103
人間百態　114
発作的反応　114
生理的現象　119
心理的行為　124
川柳の類集・屁　133
川柳の架空物・天狗　159
諺と川柳狂句　175

篇数である。
（拾1）柳多留拾遺初篇　（傍）川傍柳
（筥）柳筥　（籠）柳籠裏　（藐）藐姑柳
（玉）玉柳　（新編）新編柳多留
（梅柳）狂句むめ柳　（武）誹諧武玉川
（末）末摘花　（当新）新編柳多留当世堂

一、宝・明・安・天・寛は、宝暦・明和・安永・天明・寛政の略で、その下の漢数字は年次を示す。（明二）は明和二年になる。すべて川柳評万句合の句であるが、ごく稀に他評句の万句合もある。

一、引用句中、漢字をかなに、かなを漢字に、また異体字も一般に用いられている漢字に改めたところもある。

一、芭蕉には、創作時の年令を（　）書きにして記した。また一茶に書き込んだ年号は、文化・文政とそのまま用いた。

序

――17音（川柳）と31音（狂歌）――

徒然草の62段の話である。

後嵯峨天皇の第二皇女の悦子内親王が、まだいとけなきころ、12歳のときの話という。御所に参上した人に、言伝として托した歌は、

ふたつ文字牛の角文字直な文字　歪み文字とぞ君は覚ゆる

であった。「恋しく思ひ参らせ給ふとなり」と文末を結んでいる。この謎仕立ての歌を、江戸時代の狂歌師太田南畝こと蜀山人は、こう詠んでいる。

二つ文字牛の角文字二つ文字　ゆがみ文字にて一つ飲まばや

「こいこくで一ぱい飲もうや」と、洒落たのである。江戸の粋人たち、こんな言い回しを楽しんでいた。「鯉を食ふなぞなぞ舟の中で掛け」は、同じものを真っ正面から詠ったもの。

二つ文字牛の角文字生けづくり　（柳99）

われわれにもちょっと洒落て、「通」ぶり、得意になる心理がある。二つ文字など、友達の間では、

俳諧の流れ

17音の詩歌に俳句と川柳がある。俳句は江戸時代は俳諧とか発句といった。俳諧連歌から連句にかわり、その第一番目の句であったからである。俳諧というと芭蕉俳諧とともに、高尚なものを思い浮かべるが、俳諧とはもともと、「ふざけたおかしみ」のあるものをいった。古今和歌集に俳諧歌の一分野があるが、それよりも古い万葉集に戯笑歌が載っている。厳粛・悲壮な面持ちとは逆に、リラックスした遊び、ゆとり、相手をからかうものから、また自嘲の世界も詠みこんだものである。

文芸は聖俗の精神作用の二面の世界を表現してきたが、近世になると庶民の文学が目醒め、俗、遊びの世界が大きくもてはやされた。そこでの17音の文芸には、「俳諧」の語を看板にした。この種の世界、裏口の文学といってもよいものだが、その流れをたどってみる。

万葉集には初期の頃の天武天皇や晩期の大伴家持に、精神の両面を示した歌をみるが、ここでは戯笑歌といっても喧嘩にもなりかねない、ちょっと際どいものを紹介する。穂積朝臣が平群朝臣をあざ笑った歌である。

童ども草はな刈りそ八穂蓼を　穂積の朝臣が腋草を刈れ　（一六、三八四二）

（お前たち草は刈らなくてもいい、それよりも穂積朝臣の腋くさを刈ってくれ。臭くってしようがないから）

すると穂積朝臣も黙ってはいない。

いづくにそ　ま朱堀る丘薦畳　平群の朝臣が鼻の上掘れ　（一六、三八四三）

（塗料の朱をほる丘はどこかって、平群朝臣の赤っ鼻を掘ればいいじゃないか）

このようなやりとりは流行していたらしい。「仏造るま朱足らずは水溜る　池田の朝臣が鼻の上を掘れ」（一六・三八四〇）と、下の句の前半を入れ換え、末七はそのまま置いているのだから。

次の古今和歌集は全二十巻、十九巻目は「雑体」で、その中に「俳諧歌」として68首ほど収めている。この時代になると和歌は貴族のもてあそび物となり、室内で詠む歌が多くなる。歌枕もその現れだが、屏風の絵を見て歌にする屏風歌とか、歌合、連歌の遊びが台頭する。

連歌は上の句に対して下の句をつける。このとき、上の句の情趣をくずさずに、より情趣ある歌に仕上げることに主眼を置いた。二人での合作である。貴族の歌ったものではないが、

衣のたてはほころびにけり　源　義家
年をへし糸の乱れの苦しさに　安倍貞任